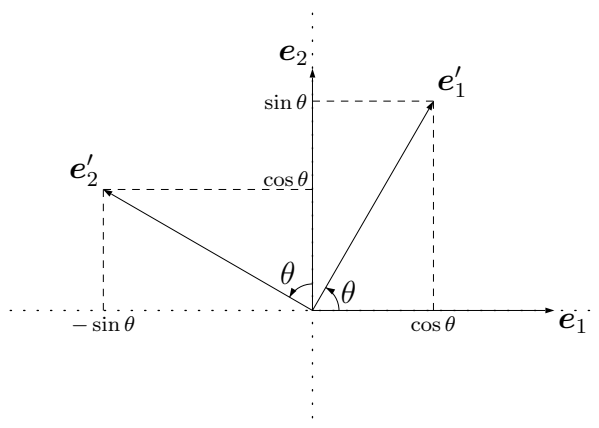
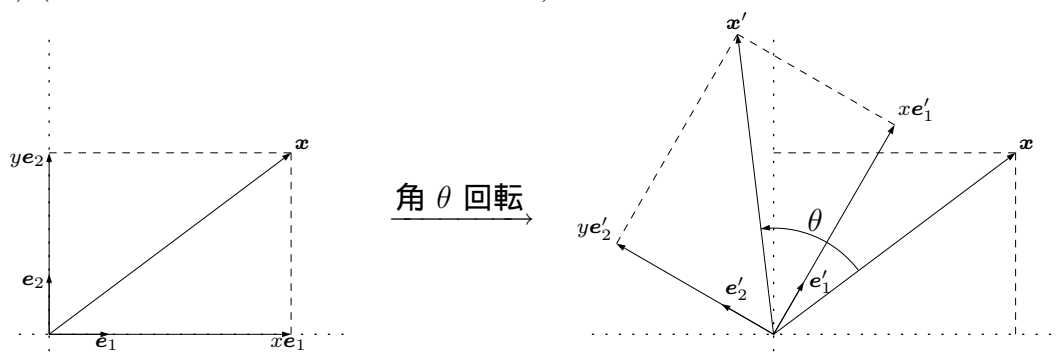


2 平面ベクトル・複素数 (その 2) の解答例

演習 2.1 (1) $e'_1 = \begin{pmatrix} \cos \theta \\ \sin \theta \end{pmatrix}$, $e'_2 = \begin{pmatrix} \cos(\theta + \pi/2) \\ \sin(\theta + \pi/2) \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -\sin \theta \\ \cos \theta \end{pmatrix}$. (下図参照)



(2) (上の図より縮尺を小さくしています)



$x = xe_1 + ye_2$ だから, 左の図のように, x は xe_1 と ye_2 によって作られる長方形の対角線にあたるベクトルである. この長方形全体を角 θ 回転したものは, xe'_1 と ye'_2 によって作られる長方形で, x' はその対角線にあたるベクトルであることが分かる. よって, $x' = xe'_1 + ye'_2$.

(3) 上記の (1), (2) により,

$$x' = xe'_1 + ye'_2 = \begin{pmatrix} x \cos \theta - y \sin \theta \\ x \sin \theta + y \cos \theta \end{pmatrix}.$$

よって, 表現行列は $\begin{pmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix}$ である.

(4) e_1 を角 θ_1 回転した後に角 θ_2 回転すると,

$$e_1 \mapsto e'_1 = \begin{pmatrix} \cos \theta_1 \\ \sin \theta_1 \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} \cos \theta_1 \cos \theta_2 - \sin \theta_1 \sin \theta_2 \\ \cos \theta_1 \sin \theta_2 + \sin \theta_1 \cos \theta_2 \end{pmatrix}.$$

一方, e_1 を角 $\theta_1 + \theta_2$ 回転したものは,

$$\begin{pmatrix} \cos(\theta_1 + \theta_2) \\ \sin(\theta_1 + \theta_2) \end{pmatrix}$$

であり, 両者が一致するので

$$\begin{cases} \cos(\theta_1 + \theta_2) = \cos \theta_1 \cos \theta_2 - \sin \theta_1 \sin \theta_2 \\ \sin(\theta_1 + \theta_2) = \cos \theta_1 \sin \theta_2 + \sin \theta_1 \cos \theta_2 \end{cases}$$

を得る.

演習 2.2 (1) $c = a + b\sqrt{-1}$ とすると, $cz = (ax - by) + (bx + ay)\sqrt{-1}$ だから,

$$x' = \begin{pmatrix} ax - by \\ bx + ay \end{pmatrix}.$$

よって, この変換は $\begin{pmatrix} a & -b \\ b & a \end{pmatrix}$ を表現行列とする 1 次変換である.

(2) $c = \cos \theta + \sqrt{-1} \sin \theta$ のとき, (1) で求めた表現行列は

$$\begin{pmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix}$$

となり, 演習 2.1 (3) で求めた表現行列と一致する.

演習 2.3 $a = \begin{pmatrix} a_1 \\ a_2 \end{pmatrix}, b = \begin{pmatrix} b_1 \\ b_2 \end{pmatrix} \in \mathbb{R}^2$ とおく.

((a) \Rightarrow (b)) a, b が線形独立であるとする. まず, 基本ベクトル e_1, e_2 を a, b の線形結合で表すことを考える.

仮定より, $a_1 \neq 0$ または $b_1 \neq 0$ である ($a_1 = b_1 = 0$ のとき a, b は線形独立ではありえないので). そこで, 必要ならば a, b を入れ替えて $a_1 \neq 0$ であるとしてよい. こ

のとき a, b の線形結合で $\begin{pmatrix} 0 \\ * \end{pmatrix}$ の形のベクトルをつくることを考えると,

$$-\frac{b_1}{a_1}a + b = \begin{pmatrix} -b_1 \\ -\frac{b_1 a_2}{a_1} \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} b_1 \\ b_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ \frac{a_1 b_2 - b_1 a_2}{a_1} \end{pmatrix}$$

を得る. ここで, もし $a_1b_2 - b_1a_2 = 0$ であったとすると a, b が線形従属であることになってしまうので, $a_1b_2 - b_1a_2 \neq 0$ が成り立つことがわかる. そこで, $d = a_1b_2 - b_1a_2$ とおいて, 上記の式に a_1/d をかければ,

$$e_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix} = -\frac{b_1}{d}a + \frac{a_1}{d}b$$

を得る. さらに e_1 の方も

$$e_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} = \frac{b_2}{d}a - \frac{a_2}{d}b$$

と表せる.

すると, 任意の平面ベクトル $x = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix} \in \mathbb{R}^2$ は

$$x = x_1e_1 + x_2e_2 = x_1 \left(\frac{b_2}{d}a - \frac{a_2}{d}b \right) + x_2 \left(-\frac{b_1}{d}a + \frac{a_1}{d}b \right) = \frac{x_1b_2 - x_2b_1}{d}a + \frac{-x_1a_2 + x_2a_1}{d}b$$

と表せることがわかる. よって, a, b は \mathbb{R}^2 を張る.

((a) \Leftrightarrow (b)) a, b が \mathbb{R}^2 を張るとする. a, b が線形従属であったと仮定して矛盾を導くことにする. このときある $c_1, c_2 \in \mathbb{R}$ で $(c_1, c_2) \neq (0, 0)$ を満たすものが存在して $c_1a + c_2b = 0$ となる. もし $c_1 \neq 0$ ならば $c = -c_2/c_1$ とすれば $a = cb$ となり, $c_1 = 0$ のときは $c_2 \neq 0$ となり $b = 0$ を得るから, $c = 0$ とすれば $b = ca$ となる. そこで, 必要ならば a, b を入れ替えて, $b = ca$ ($\exists c \in \mathbb{R}$) であったとしてよい. また, このときもし $a = 0$ とすると b も 0 となって a, b の線形結合が 0 だけになってしまうので, $a \neq 0$ となるはず. よって, a_1, a_2 のうちどちらかは 0 でない.

すると, $a_1 \neq 0$ の場合, e_2 は a, b の線形結合では表せない. なぜなら,

$$e_2 = c_1a + c_2b = (c_1 + c_2c)a \Leftrightarrow \begin{cases} (c_1 + c_2c)a_1 = 0 \\ (c_1 + c_2c)a_2 = 1 \end{cases}$$

で, 第1式を満たすためには $c_1 + c_2c = 0$ でなければならないが, このとき $(c_1 + c_2c)a_2 = 0$ となってしまう第2式が満たされない. この条件を満たす定数 c_1, c_2 は存在しないからである. しかし, これは a, b が \mathbb{R}^2 を張るということに反する. 一方, $a_2 \neq 0$ のときも同様に e_1 が a, b の線形結合では表わせないことになり, 矛盾が生じる. 従って, 結局 a, b が線形従属であるという仮定は間違っており, a, b は線形独立である. \square

別証明としては, 任意の平面ベクトル $x = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix} \in \mathbb{R}^2$ に対し, $c_1a + c_2b = x$ を c_1, c_2 に関する連立方程式とみて解く方法などがあります.

注意. $d = a_1b_2 - a_2b_1$ とおくと, 上記の証明により,

$$a, b \text{ が線形独立} \Leftrightarrow d \neq 0$$

となることがわかります. この d という量は, 行列 $\begin{pmatrix} a_1 & b_1 \\ a_2 & b_2 \end{pmatrix}$ の 行列式 と呼ばれるもので, 今後重要になってきます (行列式については2学期に線形代数 II の授業で勉強します).